

保育士の母親支援における 母親の肯定感と養育態度の改善との関係

小川 晶^[1] 植草学園大学発達教育学部

The Relation between the Mother's Childcare Attitude and how they Get Self-esteem
In Their Childcare Assisted by Childcarer

Aki OGAWA Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

本研究の目的は、母親の肯定感と養育態度の改善との関係を明らかにすることである。子育て課題を持つ母親と保育士へのインタビュー調査を実施し、「複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model)」を用いて母親の変容プロセスと保育士による母親支援プロセスとを関連付けて分析した。その結果、母親の肯定感は子育てしている側面だけでなく、子育てしている側面以外についても肯定感が向上するように支援していることが分かった。また、子育てしている以外の側面である「子としての母親」「妻としての母親」の肯定感の向上が養育態度の改善に結びついていることが明らかになった。さらに、養育態度が改善されるまでには、子どもの良いところを伸ばす提案を受け入れることから子どもの気持ちへの寄り添いが可能となるまでのプロセスが確認された。

キーワード：母親, 肯定感, 養育態度, 子育て課題, 保育士

The purpose of this article is to clear the relation between the self-esteem and the attitude on childcare inside mothers. The author interviewed mothers who had problem in childcare. Using Trajectory Equifinality Model, the author analyzed the result concerning the relation between how the interviewee had changed themselves and how childcarer had assisted them. The analysis shows childcarer assisted mothers in the aspect which is based not only on childcare itself but also on other issues except childcare. It also shows other elements in mothers also improves childcare itself. Those elements are their self-esteem in that point they were also children born from their mothers and they are not just mothers but also wives. Finally, the author see such process that mothers understand the emotional aspect of their children by accepting the childcarer proposal saying that mothers should develop the virtues of their children. As a result, such mother's attitude and understanding improves their childcare itself.

Keywords: mother, self-esteem, mother's attitude in childcare, problems in childcare, childcarer

[1] 著者連絡先：小川 晶

1. 目的

母親に育児ストレスや育児不安を生じさせる背景には、子どもが持つ要因だけでなく、それを捉える母親自身にも何らかの要因があることや、母親の要因が子どもの要因と重なってより大きな育児ストレスや育児不安を生じさせていることなどが明らかになっている。母親が抱く育児ストレスや育児不安の構成要素について佐藤ら¹⁾、川井ら²⁾³⁾は、子ども側の要因とそれを捉える母親側の要因から説明し、それらの育児不安へのサポートについて荒牧⁴⁾は、育児不安の構成要素が子ども側の要因なのか母親側の要因なのかを支援者が明確に分けて捉えることで有効なサポートが可能になるとしている。

深刻な育児ストレスや育児不安を呈す母親が増えているなか、地域の身近な場で子育て支援する保育士には有効な母親支援を行うことが期待されている。柏女⁵⁾は保護者支援を保育指導として位置づけ、保育指導技術の体系化をおこなっている。しかし、実際の保育現場ではここで扱っているケースより重篤な問題をかかえ、困難性の高い子育て課題を持つ母親を支援している現状がある。

困難性の高い子育て課題を持つ親としては、外国人登録者、ひとり親、障がい、病気、貧困、被虐、転入、若年(森田)⁶⁾があげられ、子ども側の要因である障がい、病気、発達の遅れなどが重なり、子育て課題をより深刻にさせているケースも多い。これらの子育て課題は、通常の保育の中で保育士が母親と短時間にかかわることで母親の安定した状態が保たれたり、子ども側の要因を解決できたりすることは期待できず、複数の職員や機関がかかわることが必要であり、より親密で継続的なかわりを必要とする子育て課題である。これらの子育て課題への支援方法は未だ確立されておらず、保育士の経験値に基づく実践が主であり、その経験値についても蓄積が十分になされているとは言い難い。したがってまず、保育士による母親支援において、母親の養育態度の改善がどのような支援によってもたらされるのかを解く必要がある。

そこで本研究では、保育士による困難性の高い子育て課題を持つ母親支援において、母親の肯定感と養育態度の改善との関係を母親支援プロセスの観点

から明らかにすることを目的とする。

なお、困難性が高い子育て課題の一例として高齢出産・双生児ケースの母親支援において保育士は、母親の子育てしている側面以外にも意図的に関与している(中坪・小川・諏訪)⁷⁾こと、母親が子ども中心の生活を取り込んでいく過程には母親の子育てしている側面以外への寄り添いが効果的であること(小川)⁸⁾がこれまでの研究で明らかになっている。

また母親の肯定感については、自己肯定感が「自己に対する前向きで、好ましく思う態度や感情」である(田中)⁹⁾ことから、母親としての自分を好ましく思い、子どもと子育てに向かおうとする状態を指すものとする。

2. 方法

2.1 調査方法

Z保育所の保育士と母親に対して、個別に半構造化インタビューを実施した。インタビューの母親はZ保育所の在園児の母親で、不適切な養育態度の改善が課題とされている。同じくインタビューの保育士はZ保育所の保育士で、この保育士と母親は1～2年前からクラス担任や担当制での担当保育士とその母親という関係を持つ。インタビュアーは著者が務めた。

Z市Z保育所は、子育て支援ネットワークの一機能として保育所の在籍親子への支援を捉えており、担任保育士、主任保育士、所長保育士が連携して親子支援をおこなっている。親子支援を有効におこなうための関係構築に対する考え方についても、著者がこれまでの実践や研究の中で培ったものと一致しただけでなく、実際に、子育て支援ネットワークにおける虐待やDV等に対する予防的・回復的な支援(森田)¹⁰⁾をする保育所の役割を十分果たし親子支援の有効性が確認できたので、調査対象とした。

インタビュー調査についての詳細はTable 1に、インタビューの基本データについてはTable 2, Table 3に、それぞれ示す。

2.2 分析方法

母親の肯定感と養育態度の改善との関係を明らか

Table 1 インタビュー項目とインタビュー時間

インタビューイ		インタビュー時間・回数
支援の客体	母親11名	1名あたり1～2時間, 3回実施(※)
支援の主体	・クラス担任(担当)保育士6名 ・主任保育士1名 ・所長保育士1名	1ケースあたり1～2時間, 3回実施(※)
インタビュー項目		
保育士と母親との関係構築にかかわる質問	関係性の変容プロセスについて	関係性の深まりを促進したものと出来事について
	関係性の深まりを促進したものと出来事について	
保育士の母親への具体的な支援にかかわる質問	母親自身に関することについて	子ども, 子育てに関することについて
	子ども, 子育てに関することについて	
保育士の子どもへの具体的な支援にかかわる質問	子どもの身体的・情緒的な成長発達について	子どもと母親との関係性に関することについて
	子どもと母親との関係性に関することについて	

※母親Kさんについては1回実施

Table 2 インタビューイの基本データ(母親)

母親				
No.	名前	状態	子どもの状態	パートナー
1	Aさん	実両親との関係性が希薄	発達障害	
2	Bさん	子ども期に経済的貧困	虐待疑い	再婚し夫あり 第一子は前夫との子
3	Cさん	被虐経験あり 10歳代で出産	言葉の遅れ	離婚 パートナーあり
4	Dさん	被虐経験あり 10歳代で出産	言葉の遅れ	
5	Eさん	実母との関係性が希薄	アトピー性皮膚炎	
6	Fさん	実母との一体感強い	発達障害	離婚
7	Gさん	被虐経験あり うつ病療養中	体が硬い	
8	Hさん	極度の心配性 4度目の転園	不安定	離婚 パートナーあり
9	Iさん	実両親とのかわりなし	発達障害	
10	Jさん	実母とのかわりなし うつ病療養中	双子	
11	Kさん			

※母親Kさんは健康度が高く、保育の中の通常のかかわりで安定している母親である。サンプルをとるためにインタビューイとして選出した。

Table 3 インタビューイの基本データ(保育士)

保育士		
No.	名前	経験年数
1	保育士A	5年目
2	保育士B	11年目
3	保育士C	15年目
4	保育士D	3年目
5	保育士E	5年目
6	保育士F	10年目
7	所長保育士	28年目
8	主任保育士	20年目

にするために、母親の変容プロセスを可視化できる「複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model)」(サトウ)¹¹⁾(以下、TEM)を用いて分析した。分析手順は以下の通りである。

①逐語録化されたインタビューデータを、意味内容が一つの命題に言及しているまとまり(文)ごとに切片化した。その結果、450枚のカードが作成された。

②これらのカードを時系列(子育て課題に対する母親の変容)に沿って配列し、母親の変容プロセスに関する「始点」(保育士と最初にかかわった時点での母親の状態)と「終点」(支援を受け変容が確認された時点での母親の状態)を設定した。

③配列されたカードを分類し、類似内容をまとめたカード群にラベルを付して抽象度を上げるとともに、ラベル(カード群)同士を結ぶことでネットワーク化を試みた。

④母親支援における母親の変容プロセスにおいて「等至点」「分岐点」「必須通過点」「社会的方向付け」「社会的ガイド」など、ポイントとなる点を見出すとともに、母親の肯定感の変容と養育態度に関する変容とがどのように関係しているのかについて検討した。

⑤以上をTEM図に表して概観し、母親の肯定感と養育態度の改善との関係について考察した。

なお、TEMの理論を構成する基本概念の説明及び本研究における意味をTable 4に、作成したTEM図をFigure 1に、それぞれ示す。

2.3 倫理的配慮

調査協力者へは確実に説明を行い文書での同意を得た後に協力者への心身の影響に配慮してインタビューを実施した。また、情報の扱いには十分に注

意をはらい、匿名化のもと分析をすすめた。

なお、本研究実施に際しては東洋大学倫理規定にのっとり必要な手続きを行い、東洋大学倫理委員会の承認を得た。

Table 4 TEMの理論を構成する基本概念の説明及び本研究における意味

基本理念	内容	本研究における意味
社会的方向付け：SD (Social Direction)	他の選択肢があるにも関わらず、特定の選択肢を選ぶように仕向けられる環境要因と、文化社会的圧力。	信頼関係のない支援者から提供される「母親は子どものために努力すべきである」、「母親にとって子育ては楽しい」といった情報や前提にある概念。どこにでもある一般的な情報は、困難性が高い子育て課題を持つ母親にとって、タイミングを逸していれば支援ではなく圧力となって負担をかけている。
社会的ガイダンス：SG (Social guidance)	他の選択肢があるにも関わらず、特定の選択肢を選ぶように働く援助的な力、行動を後押しする認識や認知。SDとSGは同じ事象であっても圧力にもなり援助にもなる。	保育士による母親支援。具体的には、言葉かけや見守り、寄り添いなどを指す。SG 4はSDと同様であるが、この地点では母親を後押しする援助的な力となっている。
必須通過点：OPP (Obligatory Passage Point)	ある地点からある地点に移動するために、多くの人がほぼ必然的に通らなければならない地点。	支援者である保育士に対して、自分は他の母親たちと比べて特に受け入れられているという自負的な感情、またそれを抱く地点。
分岐点：BFP (Bifurcation Point)	ある経験において転機となる状態や、実現可能な複数の経路が用意される状態の結節点。	原家族やパートナーなどとの関係性に対する母親の認知が変容し、「子育てしている以外」の母親の肯定感が向上する地点。この地点を転機として子どもに対する母親の態度が大きく変容している。
等至点：EFP (Equifinality Point)	研究者が研究目的に基づいて焦点を当てた、等しく至る点。	子どもを受け入れる行動を選択するほどに子育てに対する母親の肯定感が向上した地点。

3. 結果

3.1 母親の肯定感

保育士の母親支援における母親の肯定感について、以下のことが明らかになった。

[母親の肯定感の構造]

母親の語りから、子どもの母親である「母としての私」よりも原家族との関係性や夫やパートナーとの関係性での「子としての私」や「妻としての私」の肯定感の変容が読み取れた (Figure 2)。

同時に母親支援する保育士は、「子育てしている」母親の肯定感だけでなく、原家族との関係性における肯定感やパートナーとの関係性における肯定感などの「子育てしている以外」の母親の肯定感を向上させるようにかかわっていることが分かった。「子育てしている以外」の母親として他に、母親の持つ病気や障がいとの関係性での母親、仕事や社会的活動との関係性での母親が認められた。

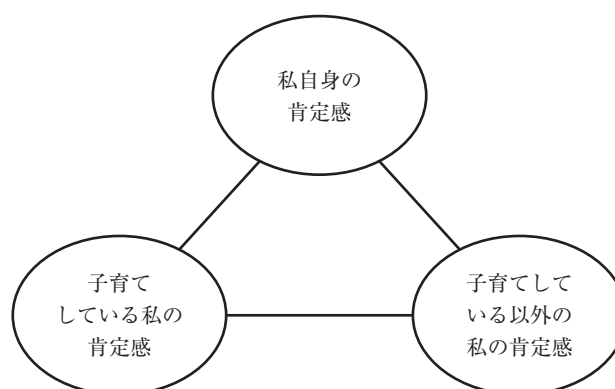


Figure 2 母親が抱く肯定感

[受け入れられた感と肯定感]

この「子育てしている以外」の母親の肯定感が向上するまでのプロセスには、自分は他の母親たちに比べて特別に受け入れられているという感情を保育士に対して抱くことが必然であると考えられた (Figure 1)。子どもが嫌いであっても子育てができていなくても、自分が丸ごと受け入れられている実

感が得られると、母親は子育てとは直接関係のない側面での自分を開示し始める。ここで保育士により、母親の「子育てしている以外」の開示自体を含め、開示から得られる母親の子育て課題に結びつく要因へのアプローチや寄り添いの支援が行われている。この寄り添いにより母親の原家族やパートナーに対する認知が変容し、その関係性へのポジティブな感情を抱くようになる。「子として」の自分や「妻として」の自分への肯定的な感情は、「子育てしている以外」の母親の肯定感の向上をもたらしていると考えられる。

もしここで「子育てしている以外」の肯定感の向上がなければ、子育てができない母親の状態は改善せず、養育態度の改善には向かわないことが推測される。

3.2 母親の肯定感と養育態度の改善

母親の肯定感の向上と養育態度の改善との関係について以下のことが明らかになった。

なお養育態度の改善は、それまで子どもの視点が不足していた母親が「子どものために」という視点を知ったり、「子どものために」の視点がずれていたことに気づいたりすることから、実際に行動するという選択をするまでの一連のプロセスのうちの、行動に変容が見られる時点以降を指すこととした。具体的には母親の語りにある、「子どものために」「養育センターに行く」、「きつく叱るまえに話を聴くようにする」、「寝る時間を早めるために持ち帰った仕事は後回しにする」といった行動の変容と、そのことによる子どもの変容をきっかけにそれまでのかわりを反省するといった行動である。

[養育態度を改善させる方向づけ]

母親の「子育てしている以外」の肯定感の向上は、「子どものために」に耳を傾けることを選択させていることが分かる。これは、養育態度の改善をもたらす前提となり、保育士からの「子どもの良いところを伸ばす提案」(Figure 1, S G 4) が下支えとなって母親の行動を方向づけている。母親の肯定感が向上したこのタイミングでの「提案」であることで保育士の支援が有効であることが分かる。同様の提案であっても、母親の肯定感が向上していないタイミングである場合、母親にとっては行動を選択する下

支えにはならず、社会的な圧力となっていることも分かった。

[養育態度の改善のプロセス]

母親の養育態度の改善には、一連のプロセスがあることが分かった。母親はかかわり方を変えてみることや言葉の教室などに通ってみることや働き方を工夫してみるなど、子どものためにすべきであると考えたことを実行してみて、その次にそれを継続するという選択をする。継続するという行動の選択は、それまでの行動の持続ではない。保育士の寄り添いを下支えとして方向づけられて、同様の行動を新たに選択しているのである。それを経て子どもの変容を確認し、子どもだけでなく自分自身の成長を内省するという行動が選択され、子どもへの寄り添いが可能となっている。子どもの変容はもっと早い段階でもたらされていることが推測されるが、母親が自らそのことに気づくという行為はこの時点で初めて選択されている。

また、この養育態度の改善のプロセスは繰り返されており、回を重ねるごとに母親の行動の選択はより明確に「子どものために」方向づけられていることも分かった。そして徐々に母親の「子育てしている」私への肯定感が向上していくことも読み取れた。

4. 考察

以上を踏まえ、保育士の母親支援における母親の肯定感を養育態度の改善との関係について、以下のことが考えられる。

[母親支援における母親の肯定感の順位性]

本調査の対象となった母親が持つ子育て課題の背景には、母親の原家族との関係性やパートナーとの関係性といった「子育てしている以外」の要因が深く関係していた。特に「子としての母親」の肯定感の向上は、養育態度の改善に有効であった。これは、困難性が高い子育て課題を持つ母親には「子として」の何らかの課題が残されており、それが「子育てしている」ことで顕在化しているのではないかと考えられる。子どもを好きになれない、子育てができないといった母親の子育て課題は、子どもや子育てへの拒否や不安そのものよりも、まず「子としての母

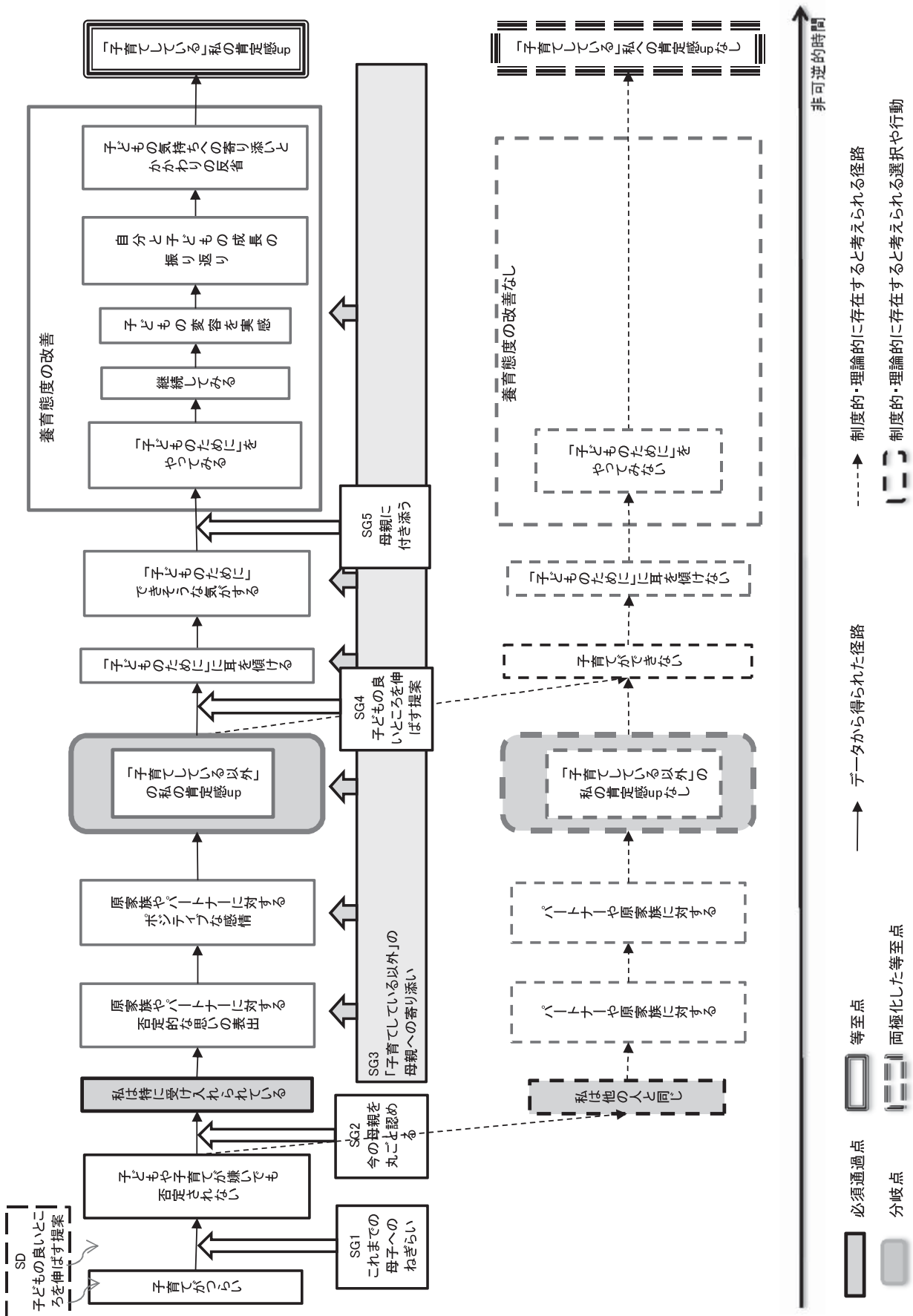


Figure 1 母親の肯定感と養育態度の変容プロセス

親」や「妻としての母親」の肯定感が低いことにある。したがって、「子育てしている以外」の母親の肯定感を向上させることが養育態度の改善に有効な支援であると考ええる。

母親の肯定感には順位性が見られ、「子育てしている私」が好きであるから望ましい養育ができるのではなく、「子として」や「妻として」の「子育てしている以外の私」の肯定感が前提となって望ましい養育ができ、望ましい養育ができることで「子育てしている私」の肯定感が高まると考える。

[母親の養育態度の改善をもたらす肯定感への支援方法]

「子どもの良いところを伸ばす」行動を母親が選択することを下支えするのは、「子育てしている以外」の母親への寄り添いであったが、母親の行動をより明確に方向づけたのは、この「提案」が信頼関係を構築できている保育士から発信されたからであろう。信頼関係のない支援者からの「提案」や、「子育てしている以外」の母親の肯定感が低い地点での「提案」であつたら、母親の行動を社会的な圧力として方向づけようとし、支援ではなく育児不安や育児ストレスを助長させる可能性も危惧される。子育てする母親に対する一般的なメッセージであっても、困難性の高い子育て課題を持つ母親にとっては圧力になりかねない。一つの「提案」をどのタイミングで誰が行うのか、母親の状態や変容の様子を見極めて行うことが必要である。「提案」が支援として有効に機能して初めて、母親は自律的に「子どものために」行動を選択したことを自覚でき、子育てしている自分への肯定感を得ることができるとされる。

5. 謝辞

本研究の実施にご理解とご協力を頂いた保護者の皆様、保育士の皆様に感謝申し上げます。

また、ご指導頂いた東洋大学社会学部森田明美教授、本研究でのTEMの援用においてご指導頂いた立命館大学サトウタツヤ教授に感謝申し上げます。

6. 文献

- 1) 佐藤達也・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則. 児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連. 心理学研究. 1994; 64(6)
- 2) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・恒次欽也. 育児に関する臨床的研究Ⅳ：子ども総研式・育児支援質問紙（試案）の臨床的有用性に関する研究. 日本子ども家庭総合研究所研究紀要. 1999; 36
- 3) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・恒次欽也. 育児不安のタイプとその臨床的研究Ⅶ：子ども総研式・育児支援質問紙（ミレニアム版）の手引きの作成. 日本子ども家庭研究所紀要. 2000; 37
- 4) 荒木美佐子. 幼稚園への入園前後における母親の育児感情の変化. 家庭教育研究所紀要. 2008. 30
- 5) 柏女霊峰. 保育指導技術の体系化に関する研究. 財団法人こども未来財団 平成20年度児童関連サービス調査研究等事業報告書. 2009
- 6) 森田明美. 子ども・家庭分野の現状を踏まえた新たな取り組み—八千代市母子自立支援プログラムを中心に. 『地域におけるつながり・見守りのかたち』. 中央法規. 2011
- 7) 中坪史典・小川晶・諏訪きぬ. 高学歴・高齢出産の母親支援における保育士の感情労働のプロセス. 乳幼児教育学研究. 2010; 19: 155-166
- 8) 小川晶. 保育園における高学歴・高齢初産母子に対する支援—母親と保育者の関係構築を基軸として—. 保育学研究. 2011; 49
- 9) 田中道弘. 自分が変わることに對する肯定的な捉え方の背景にあるものは何か?—自己肯定感, 向上心, 時間的展望, 特性的自己効力観の視点から—. マイクロカウンセリング研究年報. 2011; 6(1)
- 10) 森田明美. 八千代市母子世帯の子育て調査報告書. 東洋大学福祉社会開発研究センター. 2011
- 11) TEMではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究を目指して. サトウタツヤ編. 誠信書房. 2009